

## 照応詞と先行詞の時間的距離

—会話にあらわれる「その」「それ」「そう」等に関して—

福 島 直 恭

### 1 はじめに

例えば次の(1)の「その帽子」や、(2)の「それ」が話線の中に出てくると、文(談話)理解の一過程として、聞き手は、これらの語が具体的に何を指示するのかを決定するために、これらの照応詞に対応する先行詞を、先行する言語的文脈から捜し出すという処理を始めると考えるのが一般的であろう。

- (1) 太郎はサングラスをかけて帽子をかぶっていたが、その帽子は少し破れていた。
- (2) 太郎はサングラスをかけて帽子をかぶっていたが、それは少し破れていた。

そして、(1)の「その帽子」も(2)の「それ」も、結局はともに先行詞として「帽子」を選ぶとしても、両者の形態の違いが原因となって、(1)の「その帽子」と(2)の「それ」とでは、先行詞を決定する処理過程において相違が生じるという可能性が考えられよう。言語の認知に関する研究であれば、おそらく、照応詞を提示してから、その先行詞が決定されるまでの時間の長さとか、正反応の高さを計測するような実験によって、この違いを「認知しやすさ」の違いとして位置づけるものと思われる。

本稿では、仮に「その帽子」と「それ」との間に、先行詞決定に関する難易差のようなものが存在するとしたら、情報伝達の円滑性、効率性、正確性の確保という要求から、「その帽子」と「それ」とでは、使用にあたっての制限の強さに違いが存在し、それが実際の言語の運用の場面には両者の分

布の違いとして現れるのではないかと考え、会話資料の中にみられる「その」「それ」「そう」などの照応詞の使用について考察する。その際、特に、先行詞と照応詞が時間的にどれだけ離れて出現することが可能かという点を本稿の中心的問題とする。

## 2 調査の手続き

### 2-1 調査資料

本稿が調査対象とした資料は、次にあげる2種類のテレビ対談番組、計5本分である。便宜上、以下のように、それぞれに①～⑤の番号をつけた。

- ① 『徹子の部屋』 黒柳徹子，大島花子，柏木由紀子の対談〔テレビ朝日・92.8.放映〕（本稿における引用中，Tは黒柳徹子，Oは大島花子，Kは柏木由紀子の発話を示す）
- ② 『徹子の部屋』 黒柳徹子，青江三奈<sup>1)</sup>の対談〔テレビ朝日・92.6.放映〕（Tは黒柳徹子，Aは青江三奈の発話を示す）
- ③ 『笑っていいとも』 タモリ，久我陽子<sup>2)</sup>の対談〔フジテレビ・92.9.放映〕（Tはタモリ，Kは久我陽子の発話を示す）
- ④ 『笑っていいとも』 タモリ，仲村トオルの対談〔フジテレビ・92.9.放映〕（Tはタモリ，Nは仲村トオルの発話を示す）
- ⑤ 『笑っていいとも』 タモリ，萩原聖人の対談〔フジテレビ・92.9.放映〕（Tはタモリ，Hは萩原聖人の発話を示す）

『徹子の部屋』の方はそれぞれ放映された全分量（放映時間45分），『笑っていいとも』の方は冒頭の「テレフォンショッキング」のコーナー全体である。なお、今回は、照応表現使用に関する各会話参加者間の違い、番組間の違いなどについての考察は行っていない。

### 2-2 調査対象

一般に照応詞というと、指示詞、（3人称）代名詞、再帰代名詞などが含まれるが、今回の調査で取り扱うのは、「その」「それ」などのソ系の指示詞のみとした。その理由は、まず「この」「あの」等のコ系、ア系の指示詞が

実際の会話中に使われる時は、いわゆる場面指示とか現場指示とよばれるような用法、つまり先行詞を持たない用法か、あるいは、場面指示なのか文脈指示なのかが不明確な例がそのほとんどを占めることがわかったからである。また、3人称代名詞や再帰代名詞も会話中に現れる頻度が非常に低く、今回の調査程度の分量では、用例数が多く得られないのでこれも除外した。ちなみに、今回の調査資料の中で3人称代名詞が使われたのは、資料⑤の中にみられる2例（ともに「彼」）のみであった。

照応詞や先行詞という術語は、狭い意味では、同一文中に両者が存在する場合（束縛照応）に対してのみ使用されることもある。しかし本稿でいう照<sup>3</sup>応詞と先行詞は、必ずしも両者が同一文中に存在する場合ばかりではなく、接続した2つ文のうちの先行文中に先行詞が、後続文中に照応詞が存在する場合や、間に他のひとつあるいは複数の文をはさんだ2文の先行文中に先行詞が、後続文中に照応詞が存在する場合もある。また、先行詞を含む文の発話者とその照応詞を含む文の発話者が同一ではない場合でも、それを照応表現と認めた。照応詞が先に現れる後方照応に関しては、採集できた用例数が3例と少なかったためとりあげないこととした。

### 2-3 時間計測の範囲

本稿でいう先行詞と照応詞との時間的な距離とは、具体的には次に-----線で示すような間隔のことである。

(3) T そうそうシンデレラのお母さんじゃなくて、そう、そのシンデレラ  
 O が好きになる、そうかそうか、王子様のお母様だったのね。(資料①)  
 [先行詞「シンデレラ」-----照応詞「そのシンデレラ」1,8秒]

(4) T …すばらしいコンサートだったわねえ。であの時九ちゃんてかたが、  
 O はい。  
 T あらためてこんなにヒット曲があったのかって、みんな知ってる歌  
 T ですもんねえ。で、それをもほんとうにすばらしい、お一人お一人  
 O はい。  
 T 名前をあげたらびっくりするようなかたが歌ってくださって…(資

## 料①)

〔先行詞「知ってる歌」-----照応詞「それ」2,3秒〕

ただし、この-----の時間とは、照応詞の指示対象決定の処理のために必要な時間とは全く違うものである。照応詞が何を指すのかを決定するための処理は、例えば(4)でいえば「それ」という語を（「それ」という語だと）同定してから始まるのであって、その処理を進めるためには「それ」の統語的な関係の確認が必要であろうから、「それ」以後の部分も聞かなければならない（どこまで聞けばいいのかは不明だが）であろう。

また、次の(5)のように先行詞と照応詞とが、間に別の語をはさまずに出現した場合は、両者の時間的な距離を計測することと、照応詞の発音に必要な時間を計測することとがほとんど一致することになってしまうので、今回の調査では計測をおこなわなかった。これには(6)のように先行詞と照応詞が別の人間によって発話された場合も含まれる。

(5) T うーん、いや九州のロケ、それは関係ないのか。（資料③）

(6) T …ジェームズ三木さんは劇作家でいらっしゃるんですが……もとは

T クラブ歌手をしてらしたときにね、一緒に歌ってらしたお仲間。  
A え はい。で そ

うです。（資料②）

## 3 調査結果と考察

### 3-1 照応詞「そ～」の使用実態

調査資料の中にみられた「そ～」という形式を持つ照応詞を、その形態上から分類し、それらと先行詞とがどのような位置関係にあるか（同一文内、接続文内、非接続文つまり間に別の文をはさんだ2文内）、また、同一文中にない場合、先行詞を含む文と照応詞を含む文が同一話者の発話か、別話者の発話かという点をまとめたものが次にあげる〈表1〉である。表中、連続位置というのは、前節の最後に述べた、先行詞と照応詞とが、間に別の語（ただし終助詞の類は除く）を含まずに連続して現れているもので、今回の

〈表1〉

	同一文	接続文		非接続文		計	連続位置
		同話者	別話者	同話者	別話者		
その	12	10	9	25	5	61	3
それ	12	5	13	8	4	42	9
そう	6	7	11	12	14	50	218
そんな	0	2	0	6	1	9	4
そこ	0	1	0	0	1	2	0

調査では時間の計測を行わなかった例である。このうち、例文(6)のような例は接続文内に現れているということにもなるが、それらは表の接続文の欄には含めていない。

表の中で、「そう(～)」という形式を持つ照応詞が、先行詞と連続した位置に現れるのが218例と目立って多いのは、この形式に、例文(6)の「そう」のような応答あるいは相づち的な用法が数多くみられることによる。

〈表1〉のように、形態を基準とした分類、およびそれぞれの使用回数を大雑把に示した表からは、さして注目すべき傾向性が指摘できるわけではないようである。ただ、先行詞と照応詞が非接続文中にある場合、つまりかなり離れた位置にある場合の、「その」「それ」「そんな」などのいわゆる名詞類照応(先行詞が名詞類である照応)が多い指示詞は、先行詞と照応詞が両方とも同一話者の発話文内に存在することが圧倒的に多いという傾向があるようである。この点を、先行詞と照応詞間の時間という観点からみても、同一話者の発話内非接続文照応が平均15.7秒、別話者の場合は平均10.9秒となり、同一話者の方が先行詞と照応詞の時間的距離の平均が大きい。これは、自分の発話内に存在した語の方が、他人の発話内にあった語よりも長く記憶に残りやすいということなのかもしれないが現段階ではなんともいえない。

次に、先行詞と照応詞との間の時間という観点を取り入れて、ソ系の照応詞を形態別にもう少し詳しくみていくことにする。

### 3-2 「その～」について

ここでは「その～」という照応詞とその先行詞に関して述べる。田中(19

81) では照応を2類に分け、

(7) 太郎は花子に本を贈った。花子はその本を古本屋に売った。

(8) 太郎は花子に本を贈った。その中に手紙がはさんであった。

(7)のように、照応詞「その本」の指示対象=先行詞「本」の指示対象という関係の照応をⅠ類、そうではない(8)のような照応をⅡ類とした。本稿ではこのⅠ類をさらに3つに分ける<sup>4)</sup>。

(3) T そうそうシンデレラのお母さんじゃなくて、そう、そのシンデレラが好きになる、そうかそうか、王子様のお母様だったのね。

(資料①) →A<sub>1</sub>

(9) H あとこれは、僕の大好きな画家でカケイさんって方がいらっしゃって、今パリにいるんですけど、その方の絵なんです。

(資料⑤) →A<sub>2</sub>

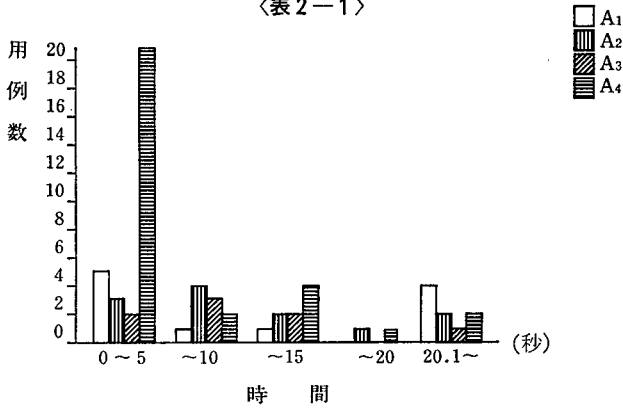
(10) T 九ちゃんの意志を継いだ皆さんは福祉活動してらっしゃるわけ  
T よう。その方達の所へ、九ちゃんのそういった  
K そうなんですはい。

T いろんな物を… (資料①) →A<sub>3</sub>

(3)は、照応詞「そのシンデレラ」=「その」+先行詞「シンデレラ」であり、(7)と同じ関係である。これを本稿ではA<sub>1</sub>と呼ぶことにする。(9)は先行詞を「カケイさんって方」とすると、(3)のような照応詞=「その」+先行詞ではなく、照応詞=「その」+先行詞の一部「方」という関係である。これをA<sub>2</sub>とする。さらに(10)の照応詞「その方達」の「方達」は、先行詞(あるいはその一部)の言いかえと考えると、これをA<sub>3</sub>とする。このように3分した理由は、照応詞が「その」+先行詞そのものか、先行詞の一部か、あるいは先行詞の言いかえかによって、先行詞を同定する処理過程に違いが生じ、それが先行詞と照応詞の距離の大きさに関する許容度の差として現れるかもしれないと考えたからである。

また、田中(1981)の照応のⅡ類は、例文(8)でいえば、照応詞「その中」のうちの「そ(の)」の部分だけが先行詞とイコールの関係となっているもの

〈表 2-1〉



〈表 2-2〉

照応詞	平均時間	照応詞	平均時間
そのA <sub>1</sub>	17.5秒	それ	6.2(4.7)秒
そのA <sub>2</sub>	10.3秒	そうB <sub>1</sub>	10.3秒
そのA <sub>3</sub>	9.1秒	そうB <sub>2</sub>	5.7秒
そのA <sub>4</sub>	5.0秒		

であり、これを本稿ではA<sub>4</sub>とする。

〈表 2-1〉のグラフは、2-3で述べた先行詞～照応詞間の時間を5秒ごとに区切り、A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>それぞれについての用例数を表示したものである。〈表 2-2〉は、A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>に属する用例のそれぞれの平均時間を示す。さらに、後に述べる「それ」や「そう」B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>の平均時間もあわせて示しておいた。これによると「その～」の中ではA<sub>1</sub>の用例(11例)の平均時間(約17.5秒)が最も長く、A<sub>4</sub>(29例)の平均時間(約5.0秒)が最も短い。それぞれの用例数があまり多くないので厳密性に欠けるかもしれないが、今回の調査の限りでは、A<sub>1</sub>>A<sub>2</sub>>A<sub>3</sub>>A<sub>4</sub>という順に先行詞と照応詞との間の時間的な距離が短くなっていることがわかる。これは、他の要因が同一ならば、

A<sub>1</sub> 「その+先行詞」=照応詞

A<sub>2</sub> 「その+先行詞の一部」=照応詞

A<sub>3</sub> 「その+先行詞の言い換え」=照応詞

A<sub>4</sub> 先行詞=「照応詞中の『そ』 or 『その』の部分」

という順に、先行詞の同定の困難度が増すため、その両者の距離の大きさに関する制約が強まるということの現れとみることができるかもしれない。ただしもしそうだとすると、A<sub>1</sub> は、形態上先行詞の同定が最も容易と考えられるので、先行詞との距離が相対的に大きくてもよいというだけであって、逆に先行詞との距離が短いことに関しての問題はないはず（ここでは文体上の問題は考慮していない）である。〈表2—1〉をみれば、A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>にも先行詞と照応詞が短い間隔で出現する例も、長い間隔で出現する例と同程度あるいはそれ以上に存在することがわかるであろう。

### 3—3 「それ」について

「それ」という照応詞は、「その」とは違って後に体言が続かないので、3—2のA<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>と平行した分類を行うことはできない。また、(4)のように先行詞が『モノ』の場合と、(11)のように『コト』の場合を区別したとしても、先行詞～照応詞間の時間に大きな違いはみられなかった。

(4) T …すばらしいコンサートだったわねえ。であの時九ちゃんてかたが、  
O 　　はい。

T あらためてこんなにヒット曲があったのかって、みんな知ってる歌

T ですもんねえ。で、それをもほんとうにすばらしい、お一人お一人  
O 　　はい。

T 名前をあげたらびっくりするような方が歌ってくださって…

(資料①)

(11) T 　　転々としての  
K あのと他に転々、こうロサンゼルスとか…　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　転々として

T 　　　　　　　　　　　　　　　　　　危ないねそれ。　　大丈夫か？

K るんですよで…　　　　　　　　　　　いや　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(資料③)

「それ」の場合、後に体言が続かず、従ってその点で、後続する体言を先行詞同定の有力な手掛かりとすることができない「その」のA<sub>4</sub>と同様と考えることができるであろう。事実、「それ」の全用例42例の、先行詞との間の





この例では、先行詞「オーディションとき」と照応詞「それ」との間に1分以上の時間が経過している。この間に話題が少しそれて、柏木由紀子が出演した舞台を黒柳徹子が見舞った時に、柏木由紀子と2人の娘達が常に同一行動をとっていたという話になる（例文の中の中略の部分）。そのため柏木由紀子の発話中の照応詞「それ」が何をさすのかわかりにくくなっている。本稿の筆者は、VTRを何度もみながら文字化をおこなって、やっと先行詞を同定できたのである。聞き手の黒柳徹子、および同席していた大島花子はたしてこの「それ」の先行詞を理解し得たかどうか不明である。この例は、照応詞が実際に使用されているからといって、その照応詞と先行詞を結びつける聞き手の処理が成功する保証は必ずしもないし、仮に成功しなくても、深刻な影響がなく会話が進行する場合が多いということを示すものであり、本稿のような方法の問題点といえるであろう。なお、この一例を除いて照応詞「それ」と先行詞との時間的距離の平均を計算すると、約4.7秒となり、ますます「その」のA<sub>4</sub>タイプの数値に近づく（〈表2-2〉参照）。

### 3-4 「そう（～）」について

まず、「そういう～（そういった～）」という形を持つ照応詞（これをB<sub>1</sub>とする）と、「そう」（「そうです」「そうだ」「そうすると」などを含む）単独のもの（B<sub>2</sub>）とにわけられる。前者は名詞類照応（先行詞が名詞類）、後者は述部類照応（先行詞が述部類）、あるいは文照応（先行詞が文）にほぼ対応すると思われる。

はじめにB<sub>1</sub>「そういう～」「そういった～」についてだが、これは(13)のように、後に名詞がついて全体で照応詞となるものであり、その点で「その」と共通点を持つ。

- (13) T パパをお花に例えたら、なんでしたっけ？  
 O いうならば 大きく立派なひまわり。  
 T ああそうだったのね。じゃいつもあなたはまあミュージカルの舞台  
 O はい。  
 T に立っても、いつもそういうひまわりが、あなたのそばについてる

T って感じで、見守って…  
O はい

(資料①)

なお、「そういう～」を A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub> のようにさらに分類することも考えたが、「そういう～」は「その～」に比べて全体の用例数が少ない（24例）こと、また、用例が A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub> という分類にはうまくあてはまらないものがあることなどから、これ以上細分しての検討は行わない。

さて、「そういう～（そういった～）」は、先行詞を決定する処理において、照応詞中の名詞（「ひまわり」）が大きな手掛かりとなると思われ、(13)などは A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub> のように、この点で比較的有利であると考えられる。このため他の条件を同一と考えれば、後続する体言が先行詞の同定にあまり役立たない A<sub>4</sub> や、体言が後続しない「それ」に比べて、先行詞と照応詞との時間的な距離に関しても、制約が弱いことが予想される。B<sub>1</sub> のタイプの先行詞と照応詞間の時間の平均は約10.3秒であった。これは、A<sub>2</sub>やA<sub>3</sub>に近い数値といえる。

次に B<sub>2</sub> タイプの検討に移る。このタイプに属する「そう」は、例えば (14) のようなものである。

(14) T 昨日なんか機嫌悪かったの？ 怒ってた？ 怒  
N いえ。 いや、怒ってないで  
T ってない いつもあんな感じなの？  
N す。 ええいつも、しかも… まあ、電話だとそうで  
N すね。 (資料④)

この B<sub>2</sub> は体言が後接しないので、照応詞の内部には先行詞を決定するための手掛かりが少なく、これまでの別の例での検討からすれば、先行詞と照応詞の距離が平均的に短い「その」の A<sub>4</sub> や、「それ」と同類のように思われる。実際、このタイプ全 26 例の先行詞～照応詞間の平均時間は 5.65 秒であった。そして、例えば (14) の「そう」は、次の (15) 中の「そう」、つまり肯定的な応答表現の中の「そう」と連続的なものであるう。

(15) T 仕事忙しい？  
K そうですね。ま映画の宣伝で今一生懸命… (資料③)

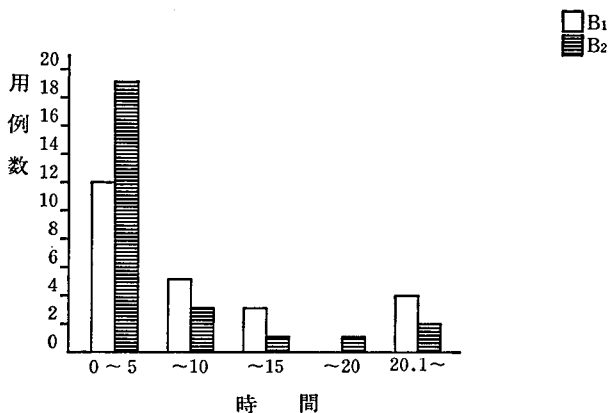
要するに、〈表 1〉の中の「連続位置」の欄に分類されて、今回は時間の計

測を行わなかった「そう」の218例とこのB<sub>2</sub>とは、本質的に区別できないものということであり、それらをあわせて考えれば、「そう」とその先行詞である述部類、あるいは文との距離の平均時間は、ソ系の照応詞の中で最短ということになるであろう。

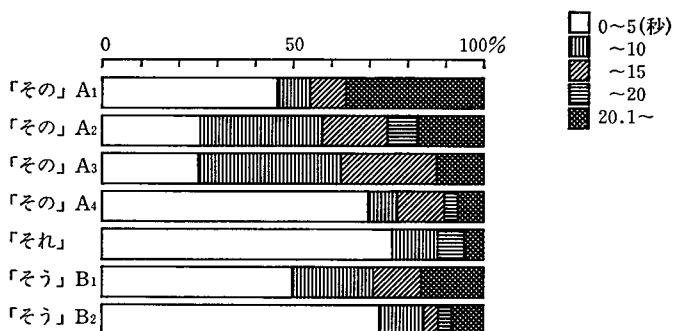
次の〈表4〉は、〈表2-1〉や〈表3〉と同様に、B<sub>1</sub>とB<sub>2</sub>についての、5秒ごとの用例数の分布を示したものである。

B<sub>1</sub>は短い時間にも、比較的長い時間にも分布しているのに対して、B<sub>2</sub>は全体の73%にあたる19例が先行詞の5秒後以内に現れている。ここで、これ

〈表4〉



〈表5〉



まで述べてきた照応詞の各タイプの、時間ごとの分布の割合をそれぞれについて算出して、グラフとしてまとめると〈表5〉のようになる。

今回の調査は分量においても十分とはいえず、そのためこのグラフに対する信頼性も欠けるといわねばならないが、一応この調査結果からは、時間的分布状況に関して、

「その」A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub>, A<sub>3</sub>, 「そう」B<sub>1</sub>… a グループ

「その」A<sub>4</sub>, 「それ」, 「そう」B<sub>2</sub> … b グループ

という2種類のグループに分けることが可能と思われる。そしてこの両グループの違いは、照応詞そのものの中に、先行詞を決定するための手掛かりがどれだけ含まれているかという点に起因するものと考えられる。

### 3-5 「そんな〜」「そこ」について

今回の資料の中で、「そんな〜」は全部で9例しかなかった。しかもそのうち4例が資料④の中に、同じ趣旨の質問に対して「そんなことない」という答えの繰り返しとして集中的に現れたものである。そのため前項までのような検討を「そんな〜」に対して行うことはしない。また、「そこ」の方は2例とさらに用例が少なかったため、これも検討の対象からはずさざるをえなかった。

### 3-6 先行詞を確定できない例について

用例の検討の最後に、特定の先行詞を確定できないような（しかも現場指示ではない）用例についてふれておく。今回の調査の中では、「その〜」1例、「それ」3例、「そういう〜（そういった〜）」18例、「そう」3例、「そんな」1例、合計26例がそれにあたる。

- (16) T あの九ちゃんのいろんな悲しい時にみてたお嬢さんがこんなに大き  
T くなり、あのマイコちゃんなんかみたら、もみんなびっくりしちゃ  
T うわねえ。 ね、その間にもお目にかかっている  
O かも そうかもしれない。  
T んだけど… (資料①)
- (17) H …僕はアメリカずーっと回ったんですよね。 いや、初めて絵を  
T 1人で?

H みたそのリトグラフの先生と、おじさんなんですけど、2人でずっ  
T うん うん うん

H と、珍道中だったんですけどね。 アメリカ。ロスからサン  
T アメリカ？

H フランシスコ行ったり、ベガス行ったり、ニューオリンズ行ったり、  
T うん

H で最後ニューヨーク行って、 1か月ちょっ  
T どれくらい行ってたの？

H と位だったかなあ。 ええ。  
T は一そう しかないねえ、15の時にそういう

H でも今考えると…  
T 経験も。

(資料⑤)

(16)、(17)ともに引用範囲をもっと広げたとしても、下線部の先行詞にふさわしいような名詞類、述部類、文等は指摘できない。(17)の「そういう経験」に対する先行詞を強いてあげるとすれば、引用部中のH(萩原聖人)の発話すべてとでもいわなければならないであろう。しかし(16)の「その間」の方は先行詞の範囲をそこまで拡大したとしても、適当な対象が見つからないであろう。結局、「その間」や「そういう経験」の意味を充足するために結びつけるべき対象は、先行詞というような特定の音形を有する言語要素ではなく、言語的文脈および非言語的文脈によって形成された聞き手の知識(の一部)なのではないかと考える必要があると思う。そういう点では次の(19)中の「あの～」と似ているともいえよう。

(19) あの宮沢りえが結婚するんだって。

内田(1982)では、一度聞いたり読んだりした文章についての再認や再生の実験<sup>5)</sup>を通して、文章の理解過程について次のように述べている。

読み手(聞き手)がある文章を読んで(聞いて)直接に受け取るものは、単に意味を構成する骨組みの構成要素にすぎない。この構成要素から、読み手(聞き手)は既有知識を喚起し、選択、変換、結合、補充、統合、構造化等のさまざまな精神操作を用いて、文章の命題の内容と構造についての一貫性のある内的な表象(mental representation)

をつくりあげる過程が理解の過程である。

この考え方に従えば、小稿の筆者が「その間」や「そういう経験」を結び付ける対象とした「言語的文脈および非言語的文脈によって形成された聞き手の知識（の一部）」とは、つまり、与えられた文章情報（言語的情報）に、受け手の既有的知識あるいはその知識の働かせ方というような受け手側の操作を加えてつくりあげられる内的な表象（あるいはその構成要素）ということになる。例えば⑩の「その間」という照応詞が、そのような内的表象のどの部分に、どのようにアクセスするのかについては、その内的表象自体の構造が解明されているとはいえない現在では明らかではないが、少なくともこのような処理の存在は認める必要があるであろう。

#### 4 おわりに

例文⑩、⑪の中の「その間」や「そういう経験」の意味を充足させるものが、先行詞という特定の音形を持つ言語の単位ではなく、前節の最後に述べたように、理解の過程の中で形成される内的な表象（あるいはその構成要素）であるとすれば、それと同じことが先行詞の特定が可能な照応詞にもあてはまる場合があるのではないかという問題がでてくるであろう。つまり、言語の単位（の記憶痕跡）にアクセスすることによって意味的に充足される照応詞と、内的表象を直接参照することによって意味的に充足される照応詞（それも照応詞と呼ぶならば）があり、その区別は、先行詞を（特定しようとする）特定できるかできないかという点での区別とは一致しないのではないかということである。この点に係わりがあると思われるものとして、言語的表示に言及する照応（表層照応）と心的表示に言及する照応（深層照応）を区別したサグとハンカマーの研究がある。今西（1987）には、その点がつぎのように要約されている。

表層照応は短期記憶の中にある命題の論理表示に基づいて解釈されるので、照応形と先行詞の間に多くの文（ないし談話）が介在した場合、短期記憶が保持することのできる範囲内でしか照応関係を処理すること

ができなくなり、適切な照応とみなされなくなる。これに対して、深層照応は、命題の表示に言及するのではなく、談話の参加者および談話の状況によって喚起される実体、性質、関係、状態等を含む談話のモデル (discourse model) に直接言及して解釈されるので短期記憶の制約を受けることがなく、照応形と先行詞の間にはいくつかの文 (ないし談話) が介在し得る。

この仮説はあくまで、先行詞という言葉的要素の存在を前提としている、逆にいえば先行詞が特定できるものだけを照応形と呼んで考察の対象としている点で、例文(16)や(17)も照応表現と区別できないと考える小稿の立場とは異なっている。しかし、短期記憶にかかわっていて、先行詞と照応詞との関係においてもその短期記憶の限界の影響を受ける照応と、そうではない (つまり長期記憶にかかわる) 照応との区別という点が興味深い。短期記憶には、量的な制約<sup>7)</sup>の他に、記憶保持時間<sup>8)</sup>に関しても限界があるといわれ、そうすると短期記憶にかかわる照応と、長期記憶にかかわる照応とでは、先行詞と照応詞との時間的な間隔にも制約の違いがありそうに思える。時間的な距離に注目した本考察が、そういう方向に発展していくことができればおもしろいと考えるが、現段階ではそこまでには至っていない。

#### 注

- 1) ②は新潟大学人文学部の天野みどり氏よりビデオテープおよび文字化した資料を貸していただいたものである。また、本稿における資料①～⑤の引用部分の表示方法も天野氏の方式を踏襲したものである。
- 2) ③～⑤は学習院女子短期大学研究生の出口牧子氏よりビデオテープおよび文字化した資料を貸していただいたものである。
- 3) 本稿では、「～詞」という言い方はふさわしくないような場合であっても、照応詞とか先行詞と呼んでいる。
- 4) 田中 (1981) では照応のⅠ類とⅡ類の違いについて、  
Ⅰ類では照応関係が先行詞と照応詞の指示対象が同一であること…(中略)…によって成立するのに対し、Ⅱ類では先行詞と照応詞が同一指示的であるほかに、聞き手の側にある種の意味論的知識が前提とされるという点にある。



と述べられている。あるいは、本稿の「その」A<sub>3</sub>も照応のⅡ類に分類されるものなのかもしれないが、どちらにしても本稿の趣旨には影響がない。

- 5) 記憶実験において「再生」とは、学習期に記憶した項目をテスト期にそのまま想起すること。これに対して「再認」とは、テスト期に、学習項目以外の妨害刺激もあわせて提示され、その中から学習項目を選択すること。
- 6) 天野（1993）でも、同趣旨の主張がなされている。
- 7) アイゼンク（1989）では、短期記憶の容量に関する古典的な研究である G. ミラーの説を紹介して、短期記憶には一度に7チャンク（±2）の情報が貯蔵できると述べている。なお、チャンクとは、以前の学習で十分獲得された情報のまとまりのことである。
- 8) 記憶保持のためにリハーサルなどを行わない場合、記憶テストのための刺激提示後15～18秒経過すると、長期記憶に転送されたもの以外は、短期記憶から失われるといわれている。例えば中川（1989）など参照。

#### 引用文献

- M. W. アイゼンク（1989）「作業記憶」『記憶——認知心理学講座1——』第2部  
認知科学研究会訳 海文堂
- 天野みどり（1993）「文脈照応『その』の名詞句解釈に果たす役割り」  
『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
- 今西 典子（1987）「照応表現とその習得」『ことばからみた心』第2章 大津由  
紀雄編 東大出版会
- 内田 伸子（1982）「文章理解と知識」『認知心理学講座3 推論と理解』第5章  
Ⅲ節 佐伯胖編 東京大学出版会
- 田中 望（1981）「コソアをめぐる諸問題」『日本語の指示詞』国立国語研究所
- 中川 大倫（1988）「記憶の過程Ⅲ」『認知と思考』第5章 放送大学出版協会  
（ふくしま なおやす 本学専任講師・人文学科国文学研究室）